世界遺産学研究 No. 6 (2018)
ISSN 2189-4728

IUCN でのインターンシップおよび第 42 回世界遺産委員会に参加して

藤井　郁乃 [1)]

所属　1)　筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻

Report of the IUCN certificate internship and the 42nd of the world heritage committee in Manama

Ikuno Fujii[1)]

英文所属　1) World Heritage Studies & World Cultural Heritage Studies, Doctoral Course of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

和文要旨：本論は、世界自然保護連盟で 6 ヶ月のインターンシップと、その中でも特に第 42 回世界遺産委員会に焦点を当てて実施報告を行うものである。第 42 回世界遺産委員会では、諮問機関による事前の不登録勧告が、会合の場で登録に転じる事例が見られた。世界遺産リストの信頼性の担保のため、制度の変革を要することが IUCN によって指摘されている。世界遺産制度が岐路に立っていることを眼前にした期間であった。

キーワード：世界遺産条約　世界遺産委員会　IUCN 報告書 諮問機関

Abstract: This is to report the author's experience as a student internship in IUCN and especially the participation in the 42nd of the World heritage committee in Manama. During the committee, it was observed that several properties which had been given "not inscribed" by the advisory body in advance changed into "inscribed" by the decisions of the committee. It is pointed by IUCN that bold reforms are urgently needed to ensure credibility of the World Heritage Convention, The author recognized it stood at a crossroads by her internship experience.

Keywords: World Heritage Convention, World Heritage Committee, IUCN, report, advisory body

１．はじめに

2018 年 2 月から 7 月まで、筑波大学大学院自然保護寄付講座の支援を受けて国際自然保護連合(以下 IUCN)でのインターンシップに従事した。筆者が従事した業務のうち、本論では第 42 回世界遺産委員会会合(以下マナマ会合)での業務内容に焦点を当てた報告を行う。

２．IUCN と世界遺産委員会の概要

IUCN は、国家、政府機関、非政府機関、科学者、ローカルコミュニティといった幅広い関係者で構成される世界最大の自然保護ネットワークである。IUCN は世界遺産制度を運営する国連教育科学文化機関(以下ユネスコ)に対して、世界自然遺産についての助言やモニタリングを行う諮問機関という位置づけで、世界遺産登録を目指す自然遺産の評価や、世界遺産に認定された遺産のモニタリング、国際的な自然保護の枠組みである世界遺産の普及啓蒙、関係者の教育やトレーニングを行っている。

世界遺産委員会とは、4 年の任期を有する 21 の委員国が中心となって構成される国際会

合である。世界遺産に関わる様々な議論が交わされる場であるが、中でも大きな議題は①既存登録物件の保全状況の確認と②新規登録物件の審議である。IUCN は既存案件のモニタリングと新規登録案件の評価を担っており、その両議題において中心的な役割を果たす。

３．マナマ会合での業務

マナマ会合（2018 年 6 月 24 日～7 月 4 日開催）は、バーレーン王国の首都マナマ市内のリッツカールトンホテル特設会場にて開催された。マナマ会合で行われた論点に関しては、同研究雑誌の中で筬島による報告がなされているため、本論での言及は避ける。

筆者は IUCN の使節団の一員として、主に 2 つの業務を担当した。1 つ目が諮問機関によるサイドイベントのオーガナイズである。世界遺産制度において科学的知見を基に遺産の評価やモニタリングを行う諮問機関は 3 つあり、IUCN は自然遺産に関わる業務を担当している。文化遺産に関わることは国際記念物遺跡会議(ICOMOS), さらに文化遺産のうち保存や修復に関する業務は文化財保存修復研究国際センター(ICCROM)に担われている。これら 3 つの組織は、毎年世界遺産会議の開催期間において、時には別の国際組織の支援を受けながら世界遺産に関するイベントを連日開催している。マナマ会合では、筑波大学大学院自然保護寄付講座と 3 諮問機関の連携の下、「遺産保護における文化と自然の連携とその啓蒙」が行われた。筆者は 3 組織の仲介となって会場の設営準備等に携わり、インターン中の所属機関だけでなく、各諮問機関とメンバーと交流を深めることができた。

2 つ目は、使節団のスケジュール管理と会議のサポートである。実際にメンバーとして現地に赴いたことで、会合の期間中、諮問機関の使節団は分単位のスケジュールで動いていることが分かった。保全状況報告や新規案件の評価を全体会議で発表する合間には、各国の大使との会議や、翌年の世界遺産委員会会合に向けた打ち合わせといった会議が目白押しで、これに加えて昼食や夕食時はサイドイベントをこなしながら行わねばならない。筆者はその過酷なスケジュールのサポート役として、チームメンバーのスケジュールを一括して管理する役割につき、メンバーに向けた会議日時のリマインドや会議室の手配、会議のトラッキングと事後報告書の作成といった秘書作業に関わった。

４．マナマ会合を終えて

IUCN でのインターンシップおよびマナマ会合は、様々な学びをもたらしてくれたものであったが、同時に世界遺産制度が岐路に立っていることを深く感じた会議でもあった。

新規世界遺産の評価は、3 つの諮問機関によって行われていることは前述した通りであるが、近年諮問機関の事前の評価に対して、委員国同士が意見をすり合わせ、世界遺産の会議の場で評価を覆えそうとするロビイング活動が活発になっていることが指摘されている。諮問機関は推薦書や現地調査を元に、新規案件が世界遺産リストの登録に見合うかどうかを 4 段階で評価する。ただちに世界遺産リストに登録される「記載」、世界遺産登録を前提とした上で情報を追加を求める「情報照会」、推薦に抜本的な改定が必要となるが再推薦は認める「記載延期」、再推薦を不可とする「不記載」である。

2007 年に石見銀山が世界遺産登録された際にはメディアにこぞって「逆転登録」と報道されたが、これは ICOMOS が事前に出した「記載延期」という評価が、世界遺産会議の会場で一転して登録に変わったことを指す。このように以前から、情報照会が記載に変わったり、記載延期が記載に変わったりと、専門家の事前の評価が会議の場でよりポジティブなものに覆されるといった動きは見られた(筬島,2017)。しかし今回、事前に「不記載」の推薦がくだされた遺産が会議の場において「記載」の評価に変わった事例が 2 件あった。これは、緊急案件を除くと、世界遺産の 40 年の歴史の中で初めてのことであった。明らかに、専門家による評価と委員国の見解の差が広まりつつあることを示すものである。

筆者は IUCN で半年間を過ごし、新規案件の評価プロセスの一部を垣間見たが、諮問機関が 1 つの事前評価に行き着くまでには、1 年 2 ヶ月をかけて現地調査が行われ、この間多くの専門家による度重なる議論を経る。科学的な知見を担保するために、実際に現場に赴き、関係者各位とやりとりした上で、幅広い専門家が白熱した議論を交わし、そしてやっと 1 つの推薦評価にいきつくのである。

世界遺産の登録に際しては、事前に各国で莫大な予算が動き、多くの関係者を巻き込んで推薦が進められる。加盟国も予算と時間を費やし、威信をかけて登録に臨む以上、早急な世界遺産リスト入りが目指されるのは理解しうることである。しかし、世界遺産というブランドの信頼性の一端が、専門家による科学的な実証の元で成り立ってきたことを忘れてはならないであろう。現在世界遺産リストに登録された資産の数は 1000 を超え、世界遺産リストの信頼性の担保、そして継続的なマネジメントとモニタリングの難しさが IUCN によって指摘されている(IUCN,2018)。マナマで会合では、この世界遺産という制度がまさに転換期にあることを、身を持って感じた。

5．謝辞

インターンシップに際し、派遣先の IUCN 世界遺産プログラムチームのメンバー、自然保護寄付講座委員長の吉田正人先生ならびに事務局の皆様をはじめとする多くの方々のご尽力をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

７．引用文献

筬島　大悟. 2017. 世界遺産の価値における普遍性と代表性－世界遺産委員会の議論とその変遷－ ，日本建築学会計画系論文集 82 巻 731: p.273 - 281.

IUCN. 2018. IUCN News. New landmark sites for people, place and identity – IUCN’s key takeaways from the 2018 World Heritage Committee meeting. https://www.iucn.org/news/iucn-42whc/201807/new-landmark-sites-people-place-and-identity-%E2%80%93-iucn%E2%80%99s-key-takeaways-2018-world-heritage-committee-meeting [2019 年 5 月 20 日確認]